

B M Xの揺籃期 17年8月26日

和田 宏

1970年代日本の製造業は輸出指向が強かったと言うよりアメリカへの輸出至上時代であった。

ロスアンゼルスに駐在員からもらった情報は、

「子供たちが20インチのシュインを使って空き地で遊んでいる、トリッキーなアクション見せる子と下りの急坂で加速してマウンドでジャンプしたりして速さを競う子がいる、ブームになりそうである、日本製の高品質なサイクルを安く供給したい。」であった。

然し当時の自転車業界の状況は、対米輸出には100万台のクォータがあり100台出荷するにも堺の組合へ出向いて然るべき書類を整える義務があった、然しよく聞いてみるとわが国からの輸出は少量で、大量輸出国は台湾であった。

現に、アメリカの自転車店大型店に並んでいる10段変速の自転車は台湾製品が多数派であった、そして良く見ると変速機やギヤ等は日本製品が多く産業構造の移り変わりを感じさせた。

さて、現地カリフォルニア、アリゾナのレースを調査して強烈なショックを受けた、アメリカ人がアメリカの文化が新しい自転車の世界を作り出そうとしていた、

常識的に自転車を分析すると

簡便だけれどオフロードでは乗れない(サスペンションが無い)

遅い、特に登りはどうにもならない、頑張ると疲れる、

壊れやすい。

然しアメリカ人は一日中家族で遊びたい、ではどうするか。

1、速くするアイディア：丘の上からスタートする

スタート地点は急斜面にして一気に加速してそのスピードを保ってゴールできるようにコース全体を工夫する、

スタート地点から50mはストレートでスピードが乗った地点にジャンプマウンドかバンクを設けたコーナーがある、

50mが重要でこれだけの距離があれば実力の有るライダーが必ずトップでジャンプする、30mでは足りない、下手なライダーがトップでジャンプすると転倒しやすく、後続が巻き込まれて危険である。

2、疲れないアイディア：一回のランは300m位にする、これでは短いのでコース説明には1/4マイル約400mと書く、ライダーは一分間全力疾走する。ゴール地点の激しい息使いも10分で治まる、30分したら又走りたくなる。

3、一日遊ぶアイディア：年齢別クラスの中で組み合わせを変えて一日に5回くらい予選を行い、タイムを集計して夕刻に決勝レースを行いチャンピオンを決める。

4、フェアプレイ：6才から16才まで年齢別クラスを作り、年齢詐称はCherry picker(さくらんぼ泥棒)と呼び排斥する。ゲート式スタートでフライングを完

壁に防止、

5、怪我を防ぐアイデア：練習あるのみ、素晴らしい。

このスポーツを支えるサイクルは

シュイン、マングース、モキシー、R&R、Red line、DG、スズキ、ウエブコ、フレームはCr Mo鋼（アルミニウムは無かった）のヘリアーク溶接（ヘリウムガスを使用、日本では成層圏にあるHeがアメリカでは地下にある由：うらやましい）が人気、

部品は一体クランク、高剛性フォーク（タンゲ）、ギヤ（スギノ）、コースターブレーキ（ベンディックス、シマノ）、ハイライズハンドルバー、20インチノビータイヤ（アラヤの alloy wheel）、ペダル（KKT）、フロントブレーキ無し、で固められていた。

筆者は1977年カリフォルニアとアリゾナのレース場を見学したが、BMX News等を見ると全国的な広がりを見せていた、レース場では家族チームが主流で僕とお姉さんがライダー、お父さんはメカニック、スタートしたらお母さん弟、妹を始め全員が応援団である、

自転車レースだから静かで応援の声も良く通る、Go for it! Pedal pedal more! と一日中叫び続ける。

ジャンプ地点ではベアリング（ヘッド、ボトム、ホイール）が軋む。

転倒も有り、何事も無かったかのようにコースに復帰する少年もいれば、中には曲がったハンドルを見て泣き出す子もいる、するとコース審判が近づいてハンドルを直してゴールを指差す、泣き止んだ少年がペダルをこぎ始めるとシーンとしていたレース場に拍手が沸く、

前述の得点記録係りはボランティアのお母さん達が担当していました。

太陽が傾きかけたころファイナルレースが厳かにアナウンスされる、年齢別や女性の優勝者は決まって、15歳以上の得点の多い順に10人くらいでチャンピオンを争う、緊張感の漂う中ゲートが倒れ選手はクランクも折れよとばかりペダルを踏む power wheel y スピードがのったところでジャンプ、ダウンヒルだからで10mも飛べる、次は高速コーナー、抑えが充分でバンクの中央をドリフトしながら通過するトップライダー、中には抑えきれずにバンクの最上部へ、否コースアウトするライダーも、トップと同じ速さで曲がることは出来ない練習だよ、練習。

最終コーナーを過ぎマウンドをひとつ超えると残るストレートは power wheel y でゴール、拍手拍手ハイ状態のチャンピオンは治まらず、トリッキーなアクションを幾つか披露して喝采を浴びる。

BMXはその後バイシクルトライアル、を派生させ現在に至っていますが、当時、アメリカ人の家族単位の週末の楽しみ方、フェアプレーを尊重する文化、新しいスポーツを生み出す創意工夫に強い印象を受けました。

写真1、は国産BMXのポスター、写真2、は筆者のダウンヒル体験の一コマ



写真 1



写真 2